

## 不登校・ひきこもりから継続的な社会参加が可能となった事例

○遠藤麻子（看護師） 藤本扶美子（公認心理師）  
医療法人耕仁会札幌太田病院 2 階デイケア課

### 【はじめに】

令和 4 年の内閣府調査によると、15 歳～64 歳の生産年齢人口において推計 146 万人、50 人に 1 人がひきこもり状態である。調査では「ひきこもり支援に関する施策は広がりを見せている。（中略）他方で、有効なひきこもり支援は確立しておらず、現場では支援者が手探りで支援を実施する状況にある。」と指摘している。

今後のより良い支援のために、小学低学年時より不登校となり長年ひきこもっていたが、当院 2 回目の退院後より継続した社会参加が可能となった事例について考察する。

### 【事例】

A 氏 20 代男性、統合失調症、発達障害疑い。小学低学年時より不登校となる。通信制高校を卒業したが、その後自宅にひきこもった。10 代後半、不安感や抑うつを訴えメンタルクリニックを初診。不調や怠薬などがあり訪問看護（以下訪看）を利用しながら就労継続支援 B 型事業所（以下 B 型）の通所を開始したが間もなく通所を中断する。20 代前半不穏著明となり当院初診、同日入院した。

### 【当院入院からの経過】

初回入院後は自宅退院、訪看の利用と B 型の通所を再開したがすぐに通所中断し、その後ひきこもり状態となり再入院に至った。再入院中に受けた心理面談を通して“ボランティアをしたい”という目標を立てられた。また、再入院直前に初めて幻覚を体験し、“もう見たくない”との思いから服薬の必要性を実感した。退院後は共同住居に入居し、通院と週 4 日のデイケア（以下 DC）通所を開始した。当初 DC 内では緊張が強く廊下にたたずむ事が多かったが、リサイクル活動の参加や自助グループで相談する機会を持ってもらう、調理実習でメンバーの指導役になってもらう、絵が得意な事を生かし図書のポスター作りを依頼・一緒に作成するなどの関わりを持った。また、個別面談やスタッフ同席で場所や作業に慣れるよう関わりを継続し、次第に自主的にプログラム参加し、通所者と会話を楽しめるようになった。

退院 6 ヶ月後より新たに見つけた B 型に週 1 日通所を開始、以降少しずつ通所回数を増やし、退院 8 か月後には週 3 日の通所を継続することができた。

### 【考察】

ひきこもりの背景にある精神疾患の治療と環境の修正などはひきこもり支援にとって避けては通れないと言われている。A 氏の場合服薬継続を獲得出来たこと、ボランティアという目標が見つかったこと、第三者と日常的に接する環境での生活を始めたことなどいくつかの要因により、継続的な社会参加が可能となったと考えられる。

今後は DC から外来へスタッフが外向き面会を重ねる、ひきこもりの方が集まって過ごすための部屋を用意するなど、DC の参加がしやすくなるような取り組みをしていきたい。